

グスタフ・マーラー

アンリ＝ルイ・ド・ラ・グランジュ

丸山正義* 訳

2 少年時・世界と自分自身を求めて (1860—1874) (承前)

この頃からマーラーは作曲しはじめる、そして両親は彼が作曲したものを楽譜に書き取るようしむけている、譜面に書き取る度にちょっとした褒美を彼に約束することで納得させたようだ。彼の書いた最初の作品—そのタイトルを聞けばマーラーの《様式の混淆》がもうすでに示されていることに微笑まずにはいられない—は6歳頃に作曲された『葬送行進曲の序奏をもつポルカ』というものだった。彼の母は彼にその曲をしみ一つなく清書すれば褒美として銀貨二枚をあげると約束した。その作業にとりかかる前にグスタフはお祈りを唱え、神様のご加護があるようにと自分に言い聞かせると絶対にしみのとれないインクを選んで清書にとりかかった。やっと最後の音符にたどり着くや彼のペン先からインクが大きく滴り落ちてすべてが水の泡になってしまった。「この日」と、マーラーは後にこのエピソードを語りながら言うことになる。「神に対する私の信頼がひどく揺らいだ。」

それからしばらくして歌曲を一曲作曲すれば数クローネ与えると息子に約束したのはベルンハルトだった、そこでグスタフはレッシングの詩を選んだ。この詩を何年たっても彼は驚くほど正確に記憶していたようだ。

トルコ人

トルコ人には美しい娘がいる、
恐ろしい番人が娘たちを見張ってる、
でも望むならもう一人、別の娘も嫁にできる。
ああ、どんなにかトルコ人になりたかろう。

どんなにか、何もかも愛する人に身をまかせたい、
どんなにか、愛する人と一緒に平和に暮らしたい、
でも、トルコ人は酒を飲まない、
いやだ、いやだ、トルコ人なんかになりたくない²⁸⁾。

のちにマーラーは自分の楽しみのために作曲する、もちろんもっと勤勉に²⁹⁾。イーグラ (61)

* 一般教育 専任講師 フランス語

ウで彼の評判が高まると親たちが自分の子どもを彼のもとに送って彼の生徒にしてくれと頼んだ。その最初の子はグスタフと1つ違いの6、7歳だった。グスタフはレッスンの間生徒の肩に腕をのせ、手を開いて頬のすぐ近くにおいた、ちょっとでも間違っただけならすばやくびんたを食らわそうというのである。そして生徒が何度も同じ音を間違えると、罰として《私の出すべき音はドのシャープであり、ドではありません》と百回書かせた。このような厳しい教育方法をとれば、この生徒を長らく自分の手元に置いておくわけにはいかなかったとしても、驚くにはあたらない。

別の生徒はこの若き親方の雷を受けてしまう、この生徒に対しても相変わらずグスタフは厳しかった。ある日、グスタフは顔中涙でぬらし走って帰ってくると急いで母親のもとへ行った。何があったの、と母親が聞くと息子は地団駄踏みながら泣いて言った、「あんな下手なピアノしか弾けないうすのろにレッスンをつけてあげるなんてもういやだ。そんなのもうできやしない、いやだ、いやだ、いやだ。」³⁰⁾とはいいいながら彼はこの生徒をほぼ一年間面倒をみて上達させることになった。生徒の親は大いに満足したようだが先生の方は不満だった。報酬は一時間5クロイツァというかなりつつましいものだった。

マーラーが将来考えることになる《標題音楽》の概念に関係する重要な事実としてグスタフは幼年期の早い時期から自分の気に入った音楽作品で物語や際だった歴史的な事件を自分で演じている。彼は音楽作品の中に物語を判読し、それを神秘的で厳かな雰囲気を出すためにきちんと窓を閉めカーテンを引いてから両親や友人達に語って聞かせるのだった。時には自分の作った物語に自分で感動して泣き出すこともあった。ベートーヴェンの『ピアノ三重奏のための変奏曲』では(《私は仕立屋カカドゥ》と題して)彼は貧しい仕立屋の生涯を、生い立ちから死ぬまでのその貧しさ、その不幸、その苦悩を演じて見せた。彼に言わせると最後の変奏曲はパロディー風の葬送行進曲であり、聴衆へのメッセージは《そして今や、この哀れな乞食はあらゆる王にも匹敵する》というものだった³¹⁾。この葬送行進曲とパロディー風という概念の結びつきはすでにマーラーらしい雰囲気を告知していることは明らかだ。

この時期マーラーは偶然には違いないが初めて作曲法を教授している。ピルニツァ通りの家の上階に間借り人がいた。それは教師の一家でエンマという名の7歳になる娘が一人いた。ある晩夕食後この娘は両親の女中をグスタフのところへやって、作曲するにはどうすればよいのか尋ねさせた。グスタフは大喜びで以下のようなことを言って女中を帰した。まずピアノに座って頭に浮かんでくるものをみんな演奏してみなさい、そして次に、主要な旋律をノートしてその旋律を変形してみたり装飾してみたりして、そういうことをやり続けた後で曲ができたならそれを書き付けなさい。女中は忠実に彼女の任務を果たしたが翌日の夜走ってグスタフのもとに戻ってくると、エンマは何か作曲したがそれを書き付ける方法が分からない、と言った。彼は彼女を助けるために飛んで行って彼女が即興演奏したものをノートした。これがエンマの作曲家デビューであり、そしておそらく最後のものだった。「ほとんどの作曲家が生涯にわたって作曲する方法は」と、マーラーは後にこのエピソードを語りながらつけ加える。「8歳の時に私が指示した方法である。」

107 現在残されているグスタフの少年時代唯一の写真は5、6歳の頃にとられた。彼は手に
(62) 楽譜を持っている³²⁾。これがもう一つのエピソードとなる。グスタフは何がなんでも写真

に撮られなくなかった、というのは、写真機を前にすると何か摩訶不思議な呪いをかけられ、そのあと、彼の全存在は永遠に紙に捕らえられてしまう、と思い込んでいたからだ。初め彼を説得することができずべそをかいた彼を家に連れ帰ったものだ。しかし翌日彼の抵抗を崩す手段が考えられた。父親が写真機を前にして写真をとってもらうことにしたのだ、するとそれを見たグスタフは父がこの不気味な装置の攻撃から安全な距離を保って離れているものと思い、しぶしぶ写真に応じることになった³³⁾。

この頃から遊びよりもまじめなことにグスタフの関心が向き始めた。テオドール・フィッシャーは鋭い目つきと漆黒の髪をした青白い少年姿の彼を描いているが、彼はガキ大将となって街角や、父の家の中庭、地下室、人気のない大きな倉庫などで、子供たちの遊びを取り仕切っていた。彼の遊び仲間の名前はほとんどわかっていないが、マーラー家の隣家に居住していた彼の将来の弁護士であるエミール・フロイント³⁴⁾、またフランツ・ウルバナクというある教授の息子³⁵⁾がその中にいたことだけが知られている。屋根裏部屋の薄暗さというものが子供たちの遊びには秘密の隠れ家めいて適当なものだった、彼らは震えおのきながら《憲兵と泥棒》ごっこをしてそこに隠れたものだ。そんなある日、マーラーは指にひどいけがをした、その痛みたるや尋常ではなく彼は何時間も泣き叫び続け部屋に一人でこもった。と、泣き止んで、今度は沈黙が続き、ついで爆笑がおこった。家人は彼の気が触れたのではないかと思い、部屋に入ってみると彼はセルヴァンテスの『ドン・キホーテ』を読んでいたのだった。これは彼の父が気持ちを落ちつかせようと特別に彼に与えたものだった。この本は彼に生涯にわたってつねに同じ効果を与えることになる³⁶⁾。

マーラーの子供時代は間違いなく、両親の諍い、とりわけ母親の心労で暗いものだった。とはいっても彼は後年自分の生涯については口を閉ざすことになる。実際彼は自分自身にとって重大な問題を決して誰かに話そうとはしなかった。例外はたったの一回。50歳の時彼は、ウィーンにいる同国人、あの精神分析学の父であるジークムント・フロイトに診察してもらう決心をする。そこで彼は両親のすさまじい喧嘩のことをフロイトに語る。この騒動に激しく動揺して子供の彼は表に飛び出し家から逃げだすと、街角で手回しオルガンが有名な民謡『おお、いとしのアウグスティン』を奏でているところに出くわす³⁷⁾。

マーラー自身この出来事に、彼が作曲しているとき、そして気持ちが高揚して一瞬佳境に入ろうかと言うとき、いつも町の歌が意に反して介入してくる理由を見ている。この《不意の引用》、これは音楽の歴史に新しい章を開くものであり、現代音楽における様式の対比、混淆を告知しているが、その起源がほとんど意識されない子供時代の記憶にあったとは驚かざるを得ないだろう。

ベルンハルト・マーラーは、粗暴な頑固者だった、しかもそれに加えて、家にいるほとんどすべての下女たちに次々と言い寄ることで自分の妻を辱めることが何度もあったようだ³⁸⁾。このように開けっぴろげな放蕩三昧は、無神論者でもなく、ましてや自由思想の持ち主でもないユダヤ人には驚くべきことである。といっても彼の息子の初期の伝記にはベルンハルトが無神論者で自由思想家であったとほのめかされてはいるけれど³⁹⁾。シュテファン・ツヴァイクの言うようにモラヴィアのユダヤ人はそれほど規律にうるさかったわけではないとしても⁴⁰⁾、ベルンハルトは彼の父祖から受け継いだ宗教をわずかながらも否定しなかったことを示す証拠はいくつもある⁴¹⁾。

彼は死ぬまでイーグラウのユダヤ教団の尊重された委員だったのだから、家庭内のモラルにたいして彼のなした放縦さは彼の評判を傷つけるようなことではなかったといえる。さて、グスタフはブリュンナー通りの小学校に通って後、1869年10月、9歳という年齢でイーグラウのギムナジウムに入学した⁴²⁾。この学校は聖イグナチヨ教会の裏手にあり、イエズス会によって建てられた建物を校舎にしている。この頃から彼の父は将来この子は音楽家になるのだろう、との心積もりでいたが、中等教育は終えさせる腹積もりでいた。最初の学期の終わりに1870年2月4日付の通知表によってグスタフのとした成績がわかる⁴³⁾。

素行	良
熱意	可
学業の成績	
宗教 (ユダヤ教)	優
ラテン語	良
ドイツ語	良
地理	可
数学	可、理解不足
理科	可、記述が曖昧
書道	良
体育	優秀
形式 (提出物)	乱雑
欠課数	4 (免除)

マーラーを受け持ったそれぞれの教師とギムナジウムの校長の正式なサインのあるこの通知表は興味深い。素行と熱意の評価は、すぐに安心してしまふ、おそらくしつけのよくない子供だったことを示している。「優」は一つだけ宗教教育に付けられており、彼の中に精神的な物事に対する傾向があったことを示しているのかもしれない。とはいっても、宗教教育は公立の教育機関ではすべて義務教育であり、ユダヤ人子弟には、決して子供達に悪い成績を付けない師に宗教教育がまかされていた、勿論それには民族の団結というわかりやすい理由がついている。だからこの成績を過大評価してはいけない。他の科目は凡庸なものだ。数学、理科、地理の第一期の評価は驚くべきものではない。こういった教科は芸術や文学に惹きつけられている少年の興味を引くことは滅多にない⁴⁴⁾。他方では体育に対する際だった評価は彼が後年肉体の鍛練にいつも関心を示したことを告知している。彼は幼少年の早い時期から彼のお気に入りの気晴らしだったボート漕ぎと水泳の二つをすでに見つけだしている、友人のデオドル・フィッシャーと一緒にになってイーグラウ近隣でその二つで遊んだものだ。

イーグラウの小学校の教師で特にこの少年に注目していたと思われる教師が一人いる。フランツ・シュトゥルムはここでチェコ語だけを教えていたことは確かだが、マーラーはギムナジウムで音楽の授業をまかされているこの人物に再び出会うことになる。シュトゥルムはまた、プライベートなレッスンもしており、彼の息子の一人が後に、彼がマーラー

の最初の教師である、と確言しているのだから、イーグラウの他の多くの先生方の言うところによるマーラーの教育の責任を彼もまた他の先生方同様わけもっていたことになる。マリー・シュトゥルム夫人は彼女の夫のこの可愛い生徒を甘やかしていたようだ、夫が帰宅するとその子の口の周りがジャムだらけになっていることがよくあった。シュトゥルムはイーグラウの三つある教区の合唱指揮者でもあった。マーラーが彼の指揮下で歌を歌ったこともおおいにあり得よう⁴⁵⁾。イーグラウやプラハで彼のとった成績の悪さは彼の放心癖がその主な原因ではないことは確かだ。思春期の途上では《おとなしい》子供が自分の身のうちに辛抱しきれずに精神の高揚を感じとってしまうこともある。ある日イーグラウのギムナジウムの校門で彼の月々の成績表が渡されることになっていた。彼の学業成績に対する期待感には彼には際限のないもののように思われ好奇心が彼に食らいつき自分の成績が知りたくてうずうずした。そうして彼は、監獄でもあるかのような自分の存在から逃げ出したいという願望に行き着いてしまうのだ。ところがこの際限のない拷問のすえ、唐突に彼は自分を抑え心につきのように言い聞かせるのだった。「おまえは自己制御をし、この悪魔を追い払うのだ。この瞬間からずいぶん長いときがすぎ、そう、おまえが大人になったとき、熱烈に望んだことへの期待が辛抱しきれなくなって許しがたいほどのものになったとき、この日のことを思い出すのだ、そして言うのだ、《あの瞬間は終わったのだ、そして同じようにどんな耐え難い瞬間にも終わりはあるのだ》と。」⁴⁶⁾

マーラーはギムナジウムでの彼の勉学に平行して、ピアノの研鑽をしその進度は早く満足のゆくものだったので1870年になると、彼に実際の演奏会を開催させることが決められた。イーグラウの週刊誌 *Der Vermittler* に、この初めての演奏会に関する批評が以下のように見られる、《1870年10月13日 定期以外の特別演奏会が開かれた。マーラー [Maler] という名の当市のユダヤ人商人の息子である9歳⁴⁷⁾の少年が大聴衆の前に初めてお目見えしてピアノを聞かせた。この未来のピアノの巨匠が聴衆から勝ち得た成功は大きなものであった、もし彼の才能に見合う質の良い楽器が与えられていれば成功はさらに大きなものであっただろう。この芸術家の恩師である、楽長ヴィクトーリン氏が昨日の成功の噂を耳にすれば、当然のこととして彼の弟子の喜びを享受することになる。》

この演奏会のプログラムは残念ながら失われているのでこの神童のレパートリーがどのようなものであったか知られていない。ベルンハルト・マーラーは、このような輝かしいデビューの後ならば、早熟のピアノの巨匠というキャリアの道を息子に踏ませる努力をすることもできただろう。後にアドルフ・フィデリーはベルンハルトが自分の息子の才能を鼓舞しのぼせと決心したときに示した彼の理解力を強調している。《グスタフは彼の誇りだった。息子に彼は彼の最も大きな希望をかけていた。しかし自分の息子に演奏家としての才能があったにもかかわらず、彼を神童として世に出そうという考えは彼には浮かばなかった。勿論グスタフは神童であった、しかもこの言葉の充実の意味において。4歳の時すでに彼は聞いたメロディーをすべてアコーデオンで演奏していた。2年後にはすでにピアノの先生を一頭身抜き去っていた。父マーラーは息子の楽才に関してはそれなりの直観と理解力を示した。彼はグスタフの才能を伸ばすために限度をおかず、何があっても彼を優遇し、いかなる犠牲にもしり込みしなかった。一つの目標を定めてしまうとそれを頑固にまもった。それにそれがグスタフの目標でもあったことを彼自身わかっていた。この

彼の絶対的な自信には予知能力のようなもの、予言者のヴィジョンのようなものがあったが、彼はそれを隠そうとしなかった。グスタフの将来は輝かしいものとなろうという彼の確信は裏切られることはなかった。たとえ栄光への階段を上るまだ最初期の段階に足をかけているところしか見なかったにしろ、彼はいわば確信をもって、グスタフ・マーラーがのぼりつめるだろう栄光の高みを予言したのである。》⁴⁸⁾

1870年の秋、11月10日にギムナジウムで行われたシラーの生誕記念の式典におそらくマーラーも参加した。この機会に《何人かのとても若い生徒がヴァイオリンとピアノを演奏した》と当市の新聞雑誌が報じている⁴⁹⁾。グスタフの全般的な学業は相変わらず注目すべき成績もないまま続けられた。そこでおそらくベルンハルトは競争心をあおることで彼をもっと早く成績を上げさせるために、1871年の秋、プラハの *Neustädter Gymnasium* に入学させる決心をした。彼は息子をこの都会の家庭に下宿させることにし、モーリッツ・グリュンフェルト⁵⁰⁾という名の裕福な皮革商の家庭を選んだ。この人物は熱心な音楽好きで11人の子供がいた。その中にピアニスト、チェリストとして有名になる演奏家のアルフレッドとハインリッヒがいる。⁵¹⁾

マーラーは後年妻に彼が10歳のときプラハに滞在した話をするようになるが、その中のいくつかはあまり信頼性はない、とはいっても彼の青春時代の最もつらかった経験であることには間違いない。プラハで彼は飢えと寒さに苦しんだようだ、それは彼に十分な食事が与えられなかったからであり、グリュンフェルト家は彼の服や履き物を横取りまでするようになり、彼に裸足を強要したらしい。にもかかわらず彼は相変わらず夢の世界に逃避していたようだ。「それが当たり前なのに違いないと考えていた」と彼は妻にこの奇妙な受け身の体験を正当化するために説明することになる。ところがグリュンフェルト家でグスタフの受けた待遇を聞いた彼の父が、自分の目でそれを確かめるためにプラハに来たらしい。彼は息子に腹一杯夕飯を食べさせるためにレストランにつれて行き、食事が終わると彼一人でグリュンフェルト家におもむき、息子をイーグラウに連れ帰るため連中と一戦交えて帰ってくると、あのイーグラウの森でのエピソードと同様、息子は身動きせずにその場において、その眼は夢見がちに遠くあらぬ方をながめ、ある種のトランス状態に陥っていたということだった。

こういったグリュンフェルト家の思いやりのなさが実際にはグスタフに何の影響も与えなかったかもしれないとしても、プラハ滞在は、それでもなおかつ、彼の感性に刻印を残した、だから、彼はそれから30年も過ぎたある日妻に話をするようになる。たまたま薄暗い小部屋に彼がはいると、19歳になるアルフレッド・グリュンフェルトと当家の女中の情事に居合わせてしまった。その娘の表情や振る舞いを勘違いして彼は彼女のところに飛んでいって助けようとした、勿論、彼女は少しも彼に感謝しなかったし、二人の若者は彼にこのことは黙っているように誓わせたものだ。後にアルマ・マーラーはグスタフがたまたま居合わせてしまったこの情事のことを決して忘れず、決してアルフレッド・グリュンフェルトのことを許さなかったと語っている。このとき受けたトラウマがアルマの言うマーラーの《ピューリタニズム》の原因の一つであったかもしれない。

マーラーの学業成績の悪さは、おそらくベルンハルトがプラハに来て息子をイーグラウに帰す原因となったものだが、彼は成績が極端に悪かったことを後になって話題にするこ

とはなかった。六ヶ月がたって彼の学業に対する成績表が作られたが、実際それはすばらしいといえるものではなかった⁵²⁾。彼の熱意は《むらがある》、素行は《適》であり、教科、つまり、ラテン語、ギリシャ語、宗教、歴史、地理、博物学、数学は《不十分》という評価がつけられており、ドイツ語だけが《満足》で、マーラーは何と64人中64番だった。この成績表の余白に次の文が読める、《以下の成績でイーグラウのギムナジウムから転校》、以下、イーグラウのギムナジウムの、勿論より良い以前の成績表の写しがある。この成績表にはとくに宗教と歌唱に二つの《優》が含まれている。

一つだけ確かなことがある。グスタフはいわゆる《良い》生徒では決してなかった、彼の放心癖はあらゆることを無視することの現れであり、彼の独立心はあらゆる権威に対する荒々しい憎悪の現れである。おそらくプラハでの滞在は何もかもが彼には気に入らなかった、とくに彼が生活した環境、雰囲気。グリェンフェルト兄弟の下の妹であったエルネスティーネ・グリェンフェルトは祖父母の家に滞在したマーラーの思い出をいくつか残している。「グリェンフェルトの子供たちはほんとうに腕白で元気いっぱいでした。彼らはマーラーが恐ろしいほど神経質なのでいらだって彼をどうしていいのかわからなかったのです。」ハインリッヒ・グリェンフェルトの思い出はその同じエピソードにむしろ皮肉な光を当てている。彼はまず自分の子供時代の雰囲気を描き出す。父はアコーデオンを演奏し、母はギターの伴奏で歌う、そして彼の兄は4歳になると音楽教育を受け、早熟の才を示す。まもなく二人の兄は室内楽の演奏会を組織し、それには外部の演奏家たちも加わっている。このようにグリェンフェルトの家庭はプラハの音楽生活の中心地の一つとなっていた。

「両親の家で」と、ハインリッヒは語る、「私たちはよく友人たちとアンサンブルをやったものです、その中に痩身蒼白の少年がいました。彼は私たちの家に下宿していました、彼の漆黒の蓬髪が印象的で今でも憶えております。でも彼の中に何か特別な徴のほんの少しも私たちは気づきませんでした。彼はプラハで音楽の勉強をしてましたが、性格は控え目そのものでした。グスタフ・マーラーという名でした。」⁵³⁾しかしながらマーラー自身は後にグリェンフェルト家の人々を驚かしたものだと言っている⁵⁴⁾、耳で聞いた難曲を正確にピアノで演奏したものだ、後になってそんなことはやろうとしてもできるようなものではなかっただろう、と。五十年後にしたためられた回想録でハインリッヒ・グリェンフェルトはマーラーの例外的な才能を示唆することも、彼の急な帰還についてなんら言及もしていない。この帰還はギムナジウムの学籍簿によると三月以降のことだった。

イーグラウに帰った後マーラーは再び音楽のレッスンを受けギムナジウムの学業につく。再び家庭生活が言い争いと悲嘆とともに始まる。再び1872年11月11日 *Kaiserlich-Königliches Obergymnasium* の光輝く祝典ホールに800人の列席者をいれて、リボンと花で飾られた詩人シラーの胸像を前にシラーの誕生日⁵⁵⁾が祝われた。まずはじめに当市のシュターツカペレによって、ベートーヴェンの序曲『プロメテウスの創造物』、マイヤベーアの『幻想曲』、フンメル『祝典行進曲』の三曲が演奏された。言葉による《プロローグ》が第八学級の若いギムナジウムの学生によって語られ、続いてピアノによって二曲が演奏された。『《ルチア》からのメドレー』が四人の奏者によって、リストの『メンデルスゾーン『真夏の夜の夢』の結婚行進曲を主題にした変奏曲』が、イーグラウの新聞雑誌

が《その賞賛すべき技術》と《その美しい演奏》を称揚する《すでにお馴染みの》若き巨匠によって演奏された。つづいて当時12歳のグスタフ・マーラーは《終わることのない嵐のような喝采》を受けた。式典は様々な合唱曲とシラーの様々な作品から引用された朗読で終わりをつげた。⁵⁶⁾

1873年4月20日グスタフは再び熱烈な喝采を浴びる。今度はバイエルンのレオポルト公とオーストリア皇女ギゼラの婚礼を祝してイーグラウの劇場で行われたガラ・コンサートのときである。彼は軍楽隊とシュターツカペレの合同オーケストラによる管弦楽作品⁵⁷⁾の合間に『ノルマ』の主題によるタルベルクの『幻想曲』を演奏した。コンサートの最後にはハインリッヒ・フィッシャーが愛国的な合唱曲とワーグナーの『祝典行進曲』を指揮した。一ヶ月後の5月17日マーラーは再びタルベルクの『幻想曲』をホテル・チャップのホールで演奏した、これは男声合唱協会の創立記念日を祝う合唱曲の演奏会の合間だった。

プラハから戻ってからのマーラーは母親以外の誰にも心を許さなかった⁵⁸⁾。たまたま母親に冷たく対したり、ちょっとつけんどな態度をとったりすると罪の意識を感じてすぐに後悔するのだった、というのも、それだけでなく彼の人生は様々な苦悩に溢れているのに、さらにもう一つ苦悩をつけ加えなければならなかったからだ。母親の方では、黙って耐えるだけだったが、彼女の希望のすべてはこの愛する息子におかれていた、そして息子の中に生きるエネルギーと精神の真の気高さを感じていたのだった。後年マーラーは父親について愛情のこもった言葉をわずかながらも発しはしなかったが、家族に対して果たすべき義務をぎりぎりのところで引き受けてはいた、ただそれは彼の兄弟姉妹の面倒を見るということだった。多分彼は母親に対して自分のすべての愛情をそそいでいた、そして彼女と一体化することによって、幼少の頃から早すぎる苦悩の体験を得ていたのだろう。

1875年春、14歳のとき、グスタフは初めて人間としての大きな苦しみを味わうことになる。彼は兄弟姉妹のなかですぐ下の弟エルンストをとくに愛していた、遊び仲間でもありピアノを弾くときのお気に入りの聴衆だった。テオドール・フィッシャーはグスタフが弟に示すほとんど《母親のような》優しきや、たとえば弟が言うことを聞かないときお説教するその情愛の深い態度に驚いたものである。ところで兄弟のなかで最も賢く才能に恵まれたこの弟、彼の周りには何か緊密な交感のようなものがありその中で成長したこの弟が長い闘病（おそらく心膜炎）の後13歳という年齢で死亡した。グスタフはその病歴の諸段階、その進展を恐れとともにつぶさに見ていった。何カ月もの間彼はほとんど病人の枕元を離れなかった、絶えず新しいお話を作っては病の弟を楽しませ、彼の気をほぐそうとした。これ以上に残酷な別れを経験したことは一度もなかったと後年彼は言う。⁵⁹⁾

アルマによれば、果てしない夢想からマーラーを引き出すことのできる事件があったとすれば、この最愛の弟の死であったことは確かだ。これがいわば彼の子供時代の最後の日、世界と自分自身を発見した重要な日だった。それから数カ月後彼は栄光へと彼を導くことになる険しい階段の一步を踏みしめるべくイーグラウを離れるのだった。

28) NBLS(Nathalie BAUER-LECHNER:Mahleriana. 未刊行資料。彼女はマーラーのウィーン音楽院時代の学友でヴァイオリニスト。彼がアルマと結婚するまでの彼の良き相談相手だった。彼女には彼女の日記を編集した『マーラーの思い出』(Erinnerungen an Gustav Mahler)と題する書物がある。邦訳は同題で音楽之友社(1988)から出版されている。)にはこの詩のほぼ正

確な引用があるがこれはレッシングの作品中に出てくるものである (*Lessings Werke. Neu hrsg. v. Franz Hüncher mit Einleitungen von Karl Goedeke. 12 Bde. Stuttgart, Göschen 1890. Bd. I. S.156*)。

29) マーラーは1875年ウィーン音楽院に入学するが、このときすでにかなりの数に達する作品を持参している。いくつかの資料によって、院長の Josef Hellmesberger がマーラーに和声と対位法の試験を免除しているのはそのためであることが確認される。NBSLでマーラーは、この二つのクラスを〈飛び級〉してしまったが、それは自分にとっては非常に〈不利〉だった、とはっきり言っている。

30) NBSL

31) 同上

32) RBM (Alfred ROLLER: *Die Bildnisse von Gustav Mahler*. ローラーはマーラーのウィーン宮廷歌劇場監督時代の同僚の演出家。二人の共同製作によるワーグナーの『トリスタンとイゾルテ』は大成功を納めた。)

33) NBSL

34) Emil FREUND: 1859年12月13日生まれ。ボヘミアのゼーラウで商業に従事するフィリップ・フロイントの息子。エミールは子供時代イーグラウビルニツァ通り265番地の Isidor Weissenstein 宅に住んでいた。

35) Franz URBANEK: 1858年10月3日生まれ。おそらくマーラーの先生の妻である Josefa Brosch 宅に寄留していた。彼はチェコ語で書いた思い出の記事を残している (*Jihlavské Listy*, Iglau, 1930. no. 30 ff: 『80年代のイーグラウの学生生活の思い出』)、この記事の中に彼がマーラーとピアノの会で連弾をしたことを思い出している、その演奏中、Müller という名の彼らの仲間の一人がリズムを取っていたようだ。

36) NBSL

37) Ernest Jones: *The Life and Work of Sigmund Freud* (Doubleday: Anchor books. p. 272).

38) AMM

39) とくに Hans Holländer、彼は全く根拠もなしに、マーラーの両親は自由思想家でシナゴグに一度も足を踏み入れたことがなかった、と主張している (*Rivista musicale Italiana*, 1936)。

40) ツヴァイクの言うところでは、彼らは〈はやくから狭義での正統から解放され〉、概して自由で、「進歩」という新しい宗教に熱心に加担している。

41) たとえば1878年12月12日彼はイーグラウの〈ユダヤ教団委員会〉委員及び〈教育委員会〉委員に圧倒的多数で選ばれている (cf. *Mährischer Grenzboten*)。 (1868年に生まれた) ユスティーネ・マーラーの代父はイーグラウのユダヤ教団の合唱隊長になる。この教団は1861年に設立された。シナゴグは1862-1863年に建設され墓地は1869年に境界が定められた。1880年イーグラウには居住するユダヤ人が1500人を数えた。

42) 伝記の中には彼が通常の年齢よりも2歳早くギムナジウムに入学したと言っているものがあるが、これらの主張には根拠がない。

43) これはマーラー・ヴェルフェル夫人所蔵のもの。他に6つの通知表がイーグラウ市の古文書資料に残っている。

44) ところが後年マーラーは科学的な問題に興味を示し友人の学者達と熱心な議論を展開することになる。

45) Franz Sturm (1817-1879) の孫娘の談話、彼女は現在ウィーンに在住。

46) NBSL

47) マーラーは実際には10歳を越えている。

48) Adolf FIDELLY 『グスタフ・マーラーの両親』 (*Neuies Wiener Journal* 1923年4月25日)

49) *Der Vermittler* (1879年11月10日の囲み記事)。二日後ベルンハルト・マーラーは同誌にプレスブルクに宛てた〈感謝公告〉をのせている。

50) Moritz (もしくは Moses Aron) GRÜNFELD 1817年生まれ。プラハのツェルトナー通り38番地在住。末子のエルンストはマーラーと同じ年でマーラーのクラスメイトであり遊び仲間。後にオーストリー軍でキャリアを積む。彼の娘、エルネスティーネ・グリュンフェルドはプラハ音楽院のピアノ教授であり、以下のいくつかの情報は彼女から得られた。

51) Alfred GRÜNFELD (1852-1924) ピアニスト。Kullak の弟子。後にワイマールでリストの庇護を受ける。ベルリンとウィーンでピアノを教え、ソリストとして弟のハインリッヒと組み世界中を回る。後にロゼー四重奏団とともに数々の演奏会を開く。

Heinrich GRÜNFELD (1855-1931) チェリスト。ベルリン音楽院教授。Scharwenka とともにプロシアの首都で定期コンサートのシリーズを確立。

52) *Stadtarchiv Prag*.

53) Heinrich GRÜNFELD: *In Dur und Moll*, p.19. Leipzig, 1923.

54) NBSL

55) シラーは1759年11月10日に生まれた。

56) Cf. *Mährischer Grenzboten*.

57) プログラムはウェストマイヤの『皇帝序曲』とスッペの『わがオーストリア』(狩猟用ホルン独奏付き)。

58) フロイトは彼の患者にエディプス・コンプレックスのことを話している。

59) NBSL 参照。テオドル・ライクは『なき子をしのぶ歌』の制作過程に関して独創的な仮説をたてている。彼によると、

詩人リュッケルトにこの頌歌を着想させた死んだ子供の一人がエルンストという名であったということはマーラーには知る由もない、しかし知らずにマーラーはこの詩に曲をつけながらエルンストという名の息子を失った父親に自己同一化したのかもしれない、というのである。